

第19回 優秀賞(銀賞)受賞作品

# 「二〇〇円のおばけ」

広島県 福山暁の星女子高等学校二年 廣見 結菜



賢治のまちから  
**全国高校生★童話大賞**

優秀賞〈銀賞〉

『100円のおばけ』

広島県 福山暁の星女子高等学校二年 廣見結菜

「うちゃん、今日何して遊ぶ？」

「そうだなー」

ミンミンミンとセミの鳴き声がうるさい。斜め右から差し込んで来る太陽がまぶしくておれは右手をかざした。ランドセルのせいで汗がシャツにへばりついている。そんなことを考え、二人の幼なじみと話しながら、おれは石ころを蹴っていた。

「オレはかくれんぼだな！」

健太はそう言うや否や、おれの石ころを勝手に奪つて蹴った。石ころが前方へ飛ぶ。

「えー、駄菓子屋さん行こうよお」  
理沙が口を尖らせながら

「こちちゃんも駄菓子買いたいよねー」

と手に持っているシューーズ袋をぶんぶん振り回す。おれに当たりそうで怖いから止めてほしい。

「じゃあかくれんぼしてから駄菓子屋に行こうぜ！ それで決まりな！」

おれの言葉に二人が「おおー！」と目を輝かせる。健太から奪い返した石ころは、勢いをつけて蹴った拍子にポンッという心地良い音をたてて水たまりの中に落ちた。一人の「あーあ」という落胆の声を背後に聞きながら空を仰いだ。

小学四年生の夏休みが今、始まる。水たまりの端には小さく虹が映つていた。

いつものように、かくれんぼの舞台は路地が張り巡らされた商店街。毎日、おれたちはここで逃走者、そしてハンターと化す。

「じゃあ理沙が鬼……じゃなくてハンターな！ よしつこうすけ、逃げるぞー！」



「了解！　おたがいの無事を祈る！」

ビシツと敬礼をしてにやりと一人で笑ったのち、おれは健太が走つて行くのとは逆の方向に慌てて逃げる。細い路地を抜けて、理沙が秒数をカウントする声が聞こえない所までやつてきた。背後に誰も接近していないことを確認して、再び前を向くと

「……なんか、ぞわぞわするなあ……」

空気が明らかに変わっていた。数秒前にそこを歩いていたおばさんの姿も見えないし、さっきまで鳴いていたカラスの声一つさえ聞こえない。ただ、しーんと静まり返っている。

「……こんなお店なんてあつたつけ？」

目の前に小さなお店がたたずんでいる。「幸福堂」と茶色の木の板に達筆で書かれていて、屋根のすぐ下に掲げられているが、こんな店を見たことなんて一度もない。引き戸はほんの少し開いていて、そのすき間の奥からはオレンジ色の光があふれている。何かにおいでおいでと手招きされているかのように、おれは不思議と店の中に引き込まれていった。

「ここにちはー……」

おそるおそる中に入つてみると、小さくて狭い室内にはところ狭しといろんな品物が置いてあつた。それらに興味を引かれて、おれは奥のイスにちょっと座るおじいさんに気付かなかつた。

「やあ、ここにちは」

「うわあ！　び、びっくりしたあ」

おじいさんは白くてふわふわ、もじやもじやしたひげを伸ばしていて、なんだかアニメやマンガによく出てくるサンタクロースに似ていた。ぽっちゃりじゃなくて痩せているけれど。そんなおじいさんは丸めがねを外しておれの顔をじっと見つめたあと、につこり笑つて独り言のように呟いた。

「お客様に会うのは久しぶりだなあ」

「そんなに長い間誰も来てなかつたの？」

「そうだよ。このお店を見つけること自体、奇跡と偶然が重ならなきや難しいんだよ。あとは運命のめぐりあわせ」

「……ふーん」



このおじいさんの言つてること、よく分かんないなあ。レアカードを引くこと以上にすごいことなのか？

おれの心を読んだように、おじいさんが口を開いた。**無邪気な表情で。**

「ホログラム加工の付いたレアカードを一度に十枚引くぐらいすごいことだよ」

「え!! すげえ!!」

「だろう？ ここではそんなレアカード並みにめったにない、不思議な宝物を売っているんだよ」

おれは店内を見回した。小さな丸い玉から大きな剣、古書などが積まれたり棚に並べられていたり、中には床に置かれたりしている。おじいさんが一つずつ手に取つて見せる。

「これはドラゴンの目玉。この剣はユニコーンの角で作られているんだよ。世界を見渡せる千里眼の双眼鏡もあるし……」

めちゃくちゃかつこいいな！ この中のものを一つ買って、健太と理沙に見せたらどうなるだろう。学校に持つていつたらどうなるだろう。あ、でも、明日から夏休みだからみんなには見せられないや。もしこの双眼鏡を持つたら、一人とのかくれんぼは永遠におれの勝ちだなあ。うらやましがる二人が少し可哀相だから、三人の秘密基地に隠してみんなで使おう。

そんな想像を風船みたいにふくらませていると、突然おじいさんの「危ない！」という叫びが聞こえた。

「え？ ……うわあああ!!

ふと前を向くと天井に届くぐらに山積みされたたくさんの本がこちらに向かって倒れてくるところだった。逃げようにも足が震えてずるずるとその場に座り込み、頭を抱えた。

その瞬間、視界の端にかいま見えたのは、立ち上がったおじいさんがユニコーンの角で作られたという杖を倒れてくる本に振りかざす姿だった。

「○△☆□!!」

おじいさんが何語か分からぬ言葉を呴いた刹那、ビビビッと部屋の中なのに稻妻<sup>いなづま</sup>が走った。青白い閃光<sup>せんこう</sup>が部屋の空気を止めた。するとスローモーションで迫っていた一冊一冊の本が空中停止してしまった。

「すげえ……もしかしてこれ魔法？」



目を輝かせて尋ねるおれにおじさんは大きく「うん」と首を縦に振った。ふと、部屋の隅に目が行つた。先程の本の山で見られなかつた場所だ。そこにはホコリをかぶつた小さくて銀色の鳥かごがあつた。

「おじいさん、これなに?」

おじいさんは空中で止まつたままの本を元通りにするのに一苦労していたので、その隙に物陰からそれを引っ張り出してみた。やっぱり、その辺のペツトショップに売つてゐる鳥かごと変わらない。

本を積み終えたおじいさんが目を真ん丸くしてかごを指差した。  
「……そこにあつたのか」

何の変哲もない、銀色の鳥かご。ランドセルにすっぽり入るぐらいの大きさだ。鳥かごに顔を近付けてのぞいても、何も見えない。

「この中にはおばけが入つてるよ」

おじいさんがにつくり笑う。

「でもさあ、何も見えないよ?」

「そりやあ部屋は電気が点いてゐるし、なにより、まだ夜じゃないからね」「そつかー……それで、双眼鏡とかこの杖とかって何円? おれにも買えるかなあ?」

商品の近くには白い値札が置いてあつて、おれはまず杖の値段を見た……けど……。

「〇の数が!! おかしいこれ!! 一、二、……七個もあるんだけど!」

「おじさんが生死をかけて取りに入つたり、『あつちの世界』の人と交渉してなんとか手に入れたものが多いからなあ?……」

そつか、とがつくり肩を落としてうつむくと、視界にさつきの鳥かごが映つた。

「じゃあおばけも……絶対高いよね?」

そう呟きながらかごをひっくり返すと、白い値札のシールが貼つてあつた。そこにあるのはなんと「二〇〇円」の文字。う、うそだろ?

「おじいさん、おれ、おばけ買う!」

「どれどれ、あ、ほんとだ、二〇〇円って書いてあるね、うん」

「でもさつきおじいさん、『そこにあるのか』って言つてたじやん。大事なものなんぢゃないの?」

「たしかに……探してはいたけれど。でもこのタイミングで出て来たんだ。これは君とおばけの運命なんだよ、きっと。だからおじさんも君にこれを売るよ」

おれはそわそわと飛びはねたい気持ちを抑えつけてランドセルのポケットから黄色のがま口財布を取り出した。中には一〇〇円が入っていた。それらを手の平に出したとき、「あ」と小さな声が漏れ出た。この一〇〇円で今日駄菓子屋でお菓子を買おうと思ってたんだった。母さんは健太のところのお母さんと違つておこづかいもくれないし、なんなら肩もみと皿洗いと洗濯物たたみをセットで手伝つたら五〇円、っていうケチな人だ。それで一週間以上前から今日のために貯めてきて……。

でも、とおれは自分に言い聞かせた。おばけとお菓子、選ぶなら……おばけでしょ！ それも、明日もこの店と出会える可能性は低い。おれは意を決しておじいさんのしわくちゃな手の平に百円玉を一枚乗せた。

「これでこのおばけは君のものだよ」

「やつた！」

おれのおばけ。今日からおばけも友達。おばけを友達にした小学生って、世界でおれ一人じゃないのかなあ。やつたぜ！

気分ルンルンでおじいさんに「ありがとう」と一言告げて店を出ようとしたらとき、「待つて！」と制止をかけられた。

「おばけのごはんは、一食分が幸せひとつ。分かったかい？」

「分かった！」

そうおれは店主のおじいさんの言葉になんの疑問も持たず、銀色に光る鳥かごをぶらさげて幸福堂をあとにした。

店の外に一步踏み出ると、ザアアッと大きく強い風が吹いて、砂が目に入らないよう両眼を固く閉じた。風の音が止んで、ゆっくり目を開いて店を振り返ると、

「あれ……何も無い」

そこにはただ狭い路地が続いているだけだった。ぼーっと突っ立つて何分かすると、

「こうちやん見つけ！」

という聞きなれた声が聞こえた。理沙だ。





「隠れもしないで何やつてんの？ まだ始まつて一分しか経つてないのに」  
理沙がおかしそうにくくくつと笑う。

「おじいさん……幸福堂……杖は……？」

「何訳分かんことを言つてんの？ あ、健ちゃん見つけ！」

理沙に連れられてきた健太はおれに尋ねる。

「その鳥かご、持つてたつけ？」

店は消えたのに、鳥かごは残つてゐる。その現実に目を瞬まばたいて、事の有様を二人に説明した。……が。

「えー、それこうちゃん、ハクチュームってやつじゃない？」

「ハクチューム？ なんだそれ？」

「白扈夢。真つ扈間に見る夢だつてー」

「その杖の話もゲンカクつてやつだよ。で、こうすけは鳥かごをどつかから拾つてきたと」

健太も首をひねりながらそう言う。夢かあ……とおれは悲しくなつてしまつた。

「まあまあがつくりしなさんなつて。お菓子ちょっと分けてやるよー」

理沙がくれたラムネ十粒と健太がくれたうまい棒チーズ味を食べたら、なんだか鼻の奥がツンとした。友達つて優しいなあ。

「あーあ。二〇〇円無駄にしちゃつたなあ」

自分の部屋に上がつて、電氣も点けずベッドに寝ねつ転ころがる。今朝カーテンを開け忘れたから、本当に真まつ暗闇くらやみだ。目をつぶつた時、何かがいきなりおれにぶつかつた。

「うわあ～」

な、なんだこれー！ 部屋の中を黒いおれのランドセルがとび回つている。というか暴れている。慌ててつかまえて、はたと気付いた。そうか、この中に鳥かごを入れたんだ。そつと開くと、かごの中に白い小さな発光体が浮かんでいる。うわあ、本当におばけだ！ おばけは驚いて声が出ないおれを脇わき目にかごのすき間からスッと出て、おれの目の前にふわふわ浮かんだ。

「おなかすいた！ すきましたよ!!」

ご飯つて……何あげれば良いんだっけ。……幸せつて……これでもいいのかな。とろけるクリームプリン。これ食べると幸せになるから。



おずおずと差し出すとおばけはガツガツと食った。大きな口を開けて一飲みにした。体の色がカラメルとプリンと生クリームの色の三層になつていて、声を出して笑った。

「宏介<sup>こうすけ</sup>、うるさいよー」

「ご、ごめんマンガが面白くて……」

母さんの言葉に嘘<sup>うそ</sup>で返して、目の前で宙返りをするおばけを見てもう一度笑った。いたんだ。やっぱりおばけはいたんだ！

「仲良くしような、おばけ！」

「もちろん！」

おれとおばけは見つめあって、いたずらしてきたみたいに、にやつと笑つた。

それから一週間、おばけとはいろんな事をした。いつもおれの部屋で夜遊んでいたけど、母さんと父さんが仕事で遅い日はリビングで遊んだ。童謡の通りに試してみようと思つて冷凍庫に入れてみたけどカチカチにはならなくて、おばけは「冷たいで過ごしやすいですよ」と言つただけだった。あとご飯である「幸せ」としてアイスを一本食べられた。体がソーダの水色に透<sup>す</sup>けていて、お腹<sup>なか</sup>を抱えて笑うとおばけも嬉しそうにリビングをぐるぐると飛び回った。

「宏介<sup>りょう</sup>、遼<sup>りょう</sup>の病院に行こつか」

ある日の朝、母さんがそうめんをすすりながらそう提案した。遼は今年小学一年生なんだけど、重い心臓の病気で学校に行けない、おれの大切な弟だ。そうだ、遼におばけを見せてあげよう。きっと喜んでくれるはず。

病院に着いて、朝から夕方までは遼の病室で夏休みの宿題をやりながら遼に学校で最近起きた出来事などを話した。例えば、健太と理沙の教科書がいれかわってお互いのランドセルに入っていたこと。そんな事を話すと遼は手を叩いて笑つた。そして絶対にこう言う。

「ぼくもともだちがほしいなあ……!!」

何度も目かの笑い話が終わつて、遼はまた何度も目かの言葉を発した。その瞬間、病室の窓から見える夕陽<sup>ゆうひ</sup>が地平線に沈んで夜になつた。母さんは先生に呼ばれて帰つて来ない。今がチャンスだ。おれはかばんにかくしてあつた小さな鳥かごを遼の目の前の机に置いた。

「にーちゃん、なにこれ？」

遼はかごをのぞき込んだり振ったりしている。そのすきにおれはカーテンを閉めて、病室をまっ暗にした。おばけが浮かび上がる。

「わあ!!」

遼が息を呑んで、両手を器<sup>うつわ</sup>の形にした。そこにおばけは乗る。昨晩そろめんを食べたので、体の色はおばけらしく白い。

「これな、おばけ！」

そしておじいさんや空中停止した本の話などをすると遼は食い付いて聞いていた。特に食べ物で体色が変化する話には興味津々で「ぼくも食べさせてみたい！」と言い出した。

「これ、今日のお昼の病院食のすいか！ 看護師さんにはナイショあとで食べようって取つておいたんだ！」

遼はいたずらっ子の表情を浮かべて備え付きの小さな冷蔵庫からすいか一切れを取り出した。おばけは皮も種も無視して飲み込んだので、赤と緑と黒のグラデーションがきれいな体色になつた。遼はそれを見て涙が出るほど笑っていた。やっぱりおれたちは兄弟で、ツボが入るポイントも同じなんだなあ。遼のこんな楽しそうな笑顔、久しぶりだ。おれはそれを見てあることを決意した。

「遼、おばけと仲良くできるか？」

「できるよ！ 初めての友達だもん！」

「おばけ、遼と一緒にいてあげてほしい」

「もちろんですよ。遼も宏介も話してると楽しいですからね！」

おれは二人がニコニコ笑っているのを見て幸せな気分になつた。そして病室を出た。

数日が経つた。おれは毎日いつもの三人で遊んでいる。だけど、最近は夜一人ぼっちが多い。両親は頻繁<sup>ひんぱん</sup>に遼の病室に呼び出されるようになつた。どうやら遼の病態が悪くなつてきたらしい。今日は母さんが血相を変えて仕事の途中なのに家に帰ってきた。そのままおれを車に乗せて病院へ。

言葉を失つた。数日ぶりに見る遼は変な機械に沢山の管でつながれ、青い顔で横たわっていた。泣き出しそうな顔をした母さんはそのまま先生に連れて行かれた。



「遼」と呼びかけるとおれの弟はゆっくり目を開けた。うつろな目だつた。誰が見ても分かる、遼は死にかけている。遼の頬に伸ばした右手の指が震えていた。

「もしかして、何か……したのか？」

遼は首を小さく横に振つて目をつぶつた。

「おばけの……幸せ……ぼくね、あんまり病院のご飯好きじやなくて、だからおばけも『幸せ』な食べ物と感じないそうで、食べ物に困つてたんだ。ぼくの幸せは、点滴てんてきが一つ取れたとか、兄ちゃんが来たとか……。だからね、ぼくその幸せな気持ちをおばけにもあげたんだ。ぼくだけが一人占めつてずるいでしょ？」

おれが言葉を失つて、遼がかすかに笑つた時、とつぱりと日が暮れた。目の前に浮かぶおばけの体は淡い虹色で、それでいてとんでもなく悲しげな表情をしていた。

「幸せって……幸せって！ そういうことだったのかよ、なんで、なんで遼の幸せは減つて減つて今もうすぐ尽きそうなのに……！ おれは毎日ふつうに暮らしてるだけなのに、好きなものが食べられて、毎日友達と遊べて……幸せが増えていく。遼の方が毎日を大事に、そう大切に……生きているのに」

病気や、幸せを食べないと生きられないおばけへのどうしようもない腹立たしさや悲しみで視界がぼやけた。真っ暗な病室で遼は荒い呼吸をしている。その時凜とした声が響く。

「おばけを食べてよ、遼。おばけ、遼と宏介に沢山幸せもらつて、幸せで満たされてるの。おばけは宏介達より前の持ち主皆に幸せをもらつて今日まで百年くらいひつそり生きてます。だからここでおばけを食べたら、遼に百年分の幸せが引き継がれると思うんだよね」

淡い虹色の体がふわふわと漂う。

「おれの幸せ……おばけと話せたこと」「ぱくり。おばけが大口を開けた。

「今日分の幸せ、宏介、ありがとう」

虹色はさらに輝きを増した。おばけの体が荒い呼吸を繰り返す遼の口元へ近付いていく。



賢治のまちから

# 高校生☆童話大賞



「おばけ、嘘だろ、本当にっ」「宏介、遼、こうやつて命は、幸せは、繋がっていくんだよ。食べることは、生きるってことなんだよ」

「待つ」

「ありがとう、楽しかった！」

最後に笑ったおばけは遼の口元に消えた。冷たい病室の床に座り込んだ瞬間、遼の荒い呼吸は止んだ。先生達が慌てて入つて来た。

それから何度も夏がやって来て、兄弟でおそろいの黒いランドセルを背負つて登校する姿に母さんがいちいち泣かないくらいまでになつた。

明日から小学生最後の夏休みかい、と大きく伸びをしかけた時、遼が「兄ちゃん」と遠くから手招きして俺を呼ぶのが聞こえた。そば傍に寄ると段ボール箱をのぞいている。

「兄ちゃん、猫、捨てられてる。お腹すかしてそうだよね……」

箱の中の白い子猫はみやあと小さく鳴いた。

「……よしつ、家に帰つてミルクあげようか！ それで家族の一員になれるよう交渉しようぜ！」

「……うんっ！！」

子猫を抱き上げた俺と遼の足元には、虹を映した小さな水たまりが広がっていた。